

ナギナタガヤ



1.特徴

ナギナタガヤは草丈が40～70cm程のイネ科一年生植物です。秋に種を播くと2週間で5cm位にまで生育し、そのままの状態ですぐ冬越します。翌春気温が上がってくると一気に伸び始めて出穂してきます。その後、次第に枯れはじめ、株元から自然に倒れて地表面を覆うようになります。

メリット

- ・雑草を抑え、春～初夏に自然に枯れて倒伏し被覆材となります。敷きわら状にして利用する場合、一般の牧草のように刈り払いの必要はなく、除草剤もいりません。また繁茂しすぎて果樹にからまる事ありません。
- ・有機物の補給が可能で、堆肥の節約にもなります。根による耕作効果とあわせて、土壌は敷きわらを厚くしたように団粒化し、何年も使い続けるとそれが厚い層になります。
- ・VA菌根菌により、果樹の根を活性化させます。
- ・夏の日照り早魃、秋の長雨といった環境の激変から果樹の根を保護し守ります。

2.栽培のポイント

播種期

高冷地(東北地方平坦地) : 9月上旬～9月下旬
(積雪期間が長い地域では雪腐病の発生が認められる場合があります。)
一般地(関東中部地方) : 9月中旬～10月下旬
暖地(西日本) : 9月中旬～11月上旬

播種量

2～3kg/10a

播種方法

散播(手播き、または散粒機を使用)
播種深度は1～2cm(播種後にロータリー等で表土と極浅く、混和します。)
早魃が続くと発芽が遅れるので、雨に合わせた方が良いです。

施肥量

元肥: 目安としてN,P,K成分量で書く5kg/10a
追肥: 春先に硫安20kg/10aを施用

肥料は園地が肥沃の場合は必要ありません。また果樹への施用と併せても結構です。しかし十分に地表面を被覆させるためには、初期生育を旺盛にさせる必要があります。導入当初は、春先に当たりの硫安1袋程度の追肥が効果的で、導入2～3年後からは、土壌養分・VA菌根菌が増え、果樹の生育を促進しますので、果樹への減肥も検討していきます。

3.利用方法と注意点

播種する園地(甫場)の雑草は除草剤等で処理し、枯らして裸地状態にする必要があります。

一般的に草生栽培は斜面など滑りやすくなるため、作業時には注意が必要です。

果樹園以外のカバークロップとしても有効です。

草生栽培は地温が下がり果樹の開花が遅れると言われる事がありますが、実際は収穫時にほとんど差が無い事が検証されております。

ナギナタガヤは春まきには不適です。